

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	佐藤美奈子
論文題目	多言語社会ブータン王国における言語生活研究 複言語話者の言語社会化と 言語認識		
(論文内容の要旨)			
<p>本研究は、「言語社会化論」を理論的枠組みとし、転換期にある多言語社会ブータンにおける複言語話者の言語意識と言語社会化の諸相を解明することを目的とする。ブータンにおいて学校教育は1961年に本格的に導入されたが、これは、複数言語が複層的に共存する社会とそれらを日常的に使い分ける複言語話者のブータン人の言語認識と言語生活をどのように変えたか。本研究はこの課題をマクロレベルにおける社会構造の変化と、ミクロレベルにおける個人の言語行動と言語意識、両者を結ぶメゾ構造としての家庭生活と地域経済生活のなかに位置づけ、3段階にわたる調査と考察から明らかにする。</p> <p>本研究の目的は、以下の2点である。第1の目的は、複数の言語選択肢をもつブータン人が個々の状況でどの言語を選択し、使用しているか、またその言語はどのような基準から選択されたものであるのかを現地調査に基づき解明し、それにより社会的文脈や個人の会話状況に関するブータン人の認識や、複数言語の社会的位置付けや機能の理解を解明する。</p> <p>第2の目的は、多言語社会に対するブータン人の対応を考察し、複数言語に関わる社会と個人の関与を明らかにすることである。</p> <p>本論文は、全6部、40章で構成される。第Ⅰ部「序論 多言語社会ブータン」では、本研究全体の目的と研究課題を示し、「言語社会化論」について概説する。</p> <p>第Ⅱ部「学校教育と言語」では、まず学校教育の「内側」にいる学生、教師、保護者が抱く現在の学校教育体制に対する認識を明らかにする。次に教育の「外側」に置かれてきた農村の女性たちに着目し、女性が成人識字教育を受け、それにより変容する個人の自己認識と家族や地域社会を明らかにする。</p> <p>第Ⅲ部「家庭と言語」では、英語ならびに国語と規定されたゾンカ語の習得により、初めて言語選択肢をもつことになった、教育第一世代の親の家庭言語意識と実践を取り上げる。マクロな社会的変化は家庭環境に変化をもたらした。その変化と三世代大家族のなかで「仲介」役を担う親世代の役割に着目する。</p> <p>第Ⅳ部「市場と言語」では、ブータンに展開する全国9つの市場で交わされる商人と客のやり取りに着目する。売り手と買い手という市場独自の関係は言語選択にどのように関わ</p>			

り、各市場の地域性はいかに反映されるか、「市場の論理」と「それぞれの市場の論理」という2つの仮説を検証する。さらに現在、国内移住者が大量に流入した首都ティンプーの市場を対象として、そこでの言語状況を移住者の言語社会化の観点から説明する。第II部から第IV部は、このようにブータン社会における学校教育、家庭、市場（地域経済）という領域を象徴する属性—教師と学生、親と子、商人と客—の言語認識と言語実践を共時的視点から解明する。

第V部「ある移民一家の語り」は、個人の生涯と時代という時間軸に基づき、ブータンの多言語状況と複言語話者の社会化過程を考察する。ブータン東部から首都ティンプーに移住して通訳ガイドとなった一人の女性（母）の語りを中心に、家族4人の語りを「羅生門的語り的手法」により考察する。教育第一世代と第二世代、移住者一世と二世の物語として時代の転換期にあるブータン社会を映す「プリズム」としての語りの作用に着目し、女性の語りを分析する。

第VI部「結論 多言語社会における複言語話者と言語」は本論文をまとめる。本研究は教育第一世代と第二世代、移住者一世と二世という異なる世代が生み出すブータンの新たな多言語状態の創造の過程と、時代の転換期という現在のブータンの時代性を強く反映する独自の言語社会化の過程を解明した。その特徴には、第1に文化的新参者（子どもや移住者）と古参者（親やホストコミュニティ）の歩み寄りと「双方性過程としての言語社会化」が生み出す「第3の文化」の創造があげられる。第2に、新旧の世界をつなぐ「仲介者」の登場とその役割認識を指摘した。第3に、時代の転換期という不明瞭で不安定な状況下で、人びとが将来の社会像と、そこで自身が用いるべき言語像を規定し、それにより自身の行動の準拠枠とすると共に、それを不在の社会の規定として固定化していくという独自の言語社会化の過程を分析した。本研究では、それを「再帰的言語社会化」と呼び、転換期にあるブータン社会において独自の過程を特徴づける新たな言語社会化モデルとして提示する。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、これまでほとんど知られることのなかったブータン人の言語生活をマクロ構造としての国家や教育、ミクロ構造としての個人、メゾ構造としての市場や家庭の観点から多角的、俯瞰的に解明を試みた論文である。

ブータン王国は長年にわたり鎖国政策をとっており、1971年に国連に加盟し、国際社会に参画して以降も、外国人の往来を完全に自由化したわけではなく、観光客に対しても自由な移動を認めていない。そのような社会的、政治的制約がある状況において、著者は国家の枢要に関わる言語政策や国語教育の領域での現地調査を敢行し、主にその調査をもとに本研究科在籍中の3年間に英文3本、和文10本の論文を執筆し、それらを総合のうえ835ページにおよぶ浩瀚な論文を完成した。著者は、本研究科博士課程への編入学に先駆けて本研究に取り組んでいたとはいえ、課程博士の枠組みにおいて短期間にこれだけ長大渾身の論文を完成したことは本研究科でも類例を見ないことであり、調査委員一同はこれに高い評価を与える。

本論文は6部40章から構成され、ブータン国民の言語生活を質問紙調査、半構造化インタビュー、ナラティブ・インタビューの3つの手法から解明するもので、言語政策はもとより、言語人類学、語用論、社会言語学、言語社会心理学、言語地理学などの言語系学問分野に対する新たな貢献となっている。

ブータン王国は30あまりの少数言語の混在する国家だが、圧倒的な多数派を占める言語が存在しない。そのような言語環境において、有力な民族語の一つであるゾンカ語を国語として全国に普及させる、ゾンカ語を中心とする国民国家の構築が進められ、ゾンカ語を学校教育の言語にするとともに、英語もまた教育言語として導入し、これまでにない複層的な言語生活を構築しつつある。英語はイギリスの保護領時代に行政語として導入され、それを承けてインド人が教育を担当していた時代から教育言語として使用されていたもので、王室も重用してきた言語である。英語は現代社会において国際語として、どの民族にとっても比較的に中立であることから、近代化を目指した学校教育にも導入され、若者が日常生活で使用する言語にも借用語として介入しているように、英語の普及は着実に進んでいる。

本論文はゾンカ語と英語を中心とする言語政策の動向をブータン人の学校教育、家庭、市場での言語行動を丹念にたどることにより解明している。著者は学校での教育活動だけではなく、寮生活における言語実践の位相にも迫り、学校生活を包括的に調査しており、ブータン人家庭を対象とした調査では都市と農村に暮ら

す人々それぞれの言語環境を明らかにし、複数世代の言語活動の特徴を明らかにする。また市場でのやりとりの分析は多言語実践の複層性を解明するもので、英語とゾンカ語、民族語の乗り換えを活写し、貴重な貢献になっている。さらに、家族への聞き取り調査は言語生活の通時的把握に成果をあげている。

本研究は先行研究の極めて乏しく、またさまざまな制約の下で現地調査を自由に行うことのできない、学術上の、また政治社会上の制約が大きい条件下にもかかわらず、限られたリソースを駆使し、ブータン人の複言語能力や多言語社会の実態を解明した点で、その意義は極めて大きい。しかしながら先行研究の乏しい研究であることから、いくつかの課題も指摘できる。

著者は本研究を「言語社会化論」の枠組みに位置づけ、「再帰的言語社会化」をモデルとして提唱しているが、いずれの理論も本論文では十二分に議論されているとは言いがたい。「言語社会化論」に関わる研究の場合、長期間にわたるフィールド調査を通じて現地の関係者と人間関係（ラポール）を築き、言説を構築することが通例であるが、本論文において著者は短期間の滞在を2回行ったにすぎず、フィールド調査の条件を十分にみたしているとは言いがたい。とはいえ、これはブータン政府が外国人に長期間の滞在や住民との自由な交流を認めていない以上、やむを得ない措置である。

また著者はブータン人の言語生活を解明するにあたり、あくまでも現在の言語活動に焦点を絞り、ブータンの置かれた地政学的配置や歴史、宗教などと言語の関係を検討していない。しかしながら、これは本研究の限界であるとともに、現地の人々の声に寄り添う著者の研究姿勢でもあることから、この点では博士論文としての価値を貶めるものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年1月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降